

山梨大学教育人間科学部と附属4校園との 連携に関する研究Ⅱ

On the Study of Ideal Collaborative Ways of their Researches and Practices between the Faculty of
Education and Human Sciences of University of Yamanashi and its Attached Schools (Part 2)

鳥海順子* 古家貴雄** 谷口明子*** 長谷部美佐子**** 荻原ひろみ****
Junko TORIUMI Takao FURUYA Akiko TANIGUCHI Misako HASEBE Hiromi OGIHARA
古屋あゆみ**** 岡村太郎**** 風間俊宏**** 山本 撰**** 大脇 博****
Ayumi FURUYA Taro OKAMURA Toshihiro KAZAMA Osamu YAMAMOTO Hiroshi OHWAKI
赤岡玲子**** 望月 陵**** 手塚雅仁**** 青木洋子**** 金丸実奈江****
Reiko AKAOKA Ryo MOCHIZUKI Masahito TEZUKA Yoko AOKI Minae KANEMARU
花形 章**** 角田 修**** 石井 敬**** 山本英寿****
Akira HANAGATA Osamu TSUNODA Takashi ISHII Hidetoshi YAMAMOTO
澤登義洋**** 望月之美**** 泉 晋一****
Yoshihiro SAWANOBORI Yukimi MOCHIZUKI Shinichi IZUMI

I はじめに

前報では、大学と附属4校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）の研究連携を目的として成立した新共同研究会（平成22年度より共同研究会に名称変更した。）について、過去5カ年の研究の経過と成果を報告した（鳥海他, 2010）。現在、共同研究会は、大学と附属4校園が対等な関係で「教育実習を行なう学生にどのような手立てや指導方法を使って、教師という職業意識や使命感を育てていくべきか」をテーマとして研究を行っている。昨年度は、附属4校園と大学との連携内容、および附属4校園で実習を行なった学生とその担当者を対象に実施したアンケート調査のうち、平成20年度のパイロット調査について報告した。その結果、実習生は、教育実習を「現場経験を通して、学校や教師の仕事、子どもの実態を知り、自分の教師としての適性を確認し、自己課題を見つける機会」として捉えていた。教育実習は教育実習生が授業を行うために必要な基本的な力や児童生徒と関わる力について確認する貴重な機会となっており、その内容は多岐にわたっていた。教員志望者数は実習前に比べて、実習後にやや減少し、実習前には存在しなかった「わからない」「無記入」とした回答が新たに加わった。このことは、実習前には漠然としかとらえられなかった教師という仕事を、実習によって明確化し、自己の能力との落差を実感した学生の正直な思いの反映ではないかと思われた。今回は、学生を指導した教育実習校の教員に調査を実施し、学生の調査結果との比較検討を行った。

II 研究方法

(1) 調査対象：実習指導教員合計13名と前報で調査した実習生のうち本調査教員の指導を受けた実習生合計13名。

なお、教育実習協力校の内訳は指導教員、教育実習生それぞれX中学校7名、Y小学校6名であった。

* 障害児教育講座 ** 英語教育講座 *** 教育実践創成専攻（教職大学院） **** 附属幼稚園 ***** 附属小学校
***** 附属中学校 ***** 附属特別支援学校 ***** 笛吹市立富士見小学校（前附属教育実践総合センター）
***** 北杜市立小淵沢中学校（前附属中学校） ***** 甲府市立伊勢小学校（前附属小学校）
***** 南アルプス市立小笠原小学校（平成17-20年度附属教育実践総合センター）
***** 甲府市立山城小学校（前附属小学校） ***** 甲府市立上条中学校（前附属中学校）

- (2) 調査日：教員は平成21年3月1日～3月31日、実習生は平成20年7月24日～25日に調査を実施した。
- (3) 回収率：教員、学生ともに100%であった。
- (4) 比較する質問項目：前報の実習生用の調査項目を参考に教員用の項目は「①実習の意義」「②困難点」「③もっとつけておくべき能力」「④研究授業、研究会からの学び」「⑤授業計画の作成」「⑥全体的な感想」の6項目とした。回答はそれぞれの項目について自由記述を求めた。

Ⅲ 調査結果

指導教員と指導を受けた教育実習生ごとに調査結果を対応させ、表1～13のように整理した。なお、質問項目の番号は「①学生にとっての実習の意義」「②実習指導において実際に困難を感じたこと」「③学生にもってほしいと感じられた資質・能力」「④教育実習経験（研究授業や研究会を含めて）から学んでほしいこと」「⑤授業計画の作成指導において感じたこと」「⑥全体的な感想」の項目番号に対応している。

表1 実習指導教員Aと教育実習生aの調査結果(X中学校)
(指導教員A:教職経験10年)

質問項目	実習指導教員A	教育実習生a
①	・教科以外の教師の仕事を知ること ・担任等様々な立場で生徒を見る体験 ・実体験から適性等について自分と向き合うこと	・生徒の実態を知る。 ・自分の力不足を感じる。
②	・記載なし	・専門教科での自分の力不足
③	・アドバイスを謙虚に受け入れる ・生徒との対応等全ての面での誠実さ	・専門教科の知識 ・指導できる自信
④	・①と同じ	・良い授業をつくるのに終わりがいいこと
⑤	・記載なし	・これまでの大学の授業 ・一つひとつの活動のつながり
⑥	・記載なし	・教育実習でしか学べないことがたくさんあり、大きく変わった。 ・勉強不足を感じたのでこれから努力したい。

表2 実習指導教員Bと教育実習生bの調査結果(X中学校)
(指導教員B:教職経験17年)

質問項目	実習指導教員B	教育実習生b
①	・教育現場の実態（教師の仕事の多さ・生徒の実態） ・自分の考えていることを前向きに実践（授業や部活等）	・現場を知ることで大変なことも楽しいことも学び、実際に授業を行い、実態を知ること
②	・困難に感じたことは特になし	・机間巡視の時間のとり方、全員の考えの把握
③	・教科の知識 ・失敗を恐れずチャレンジ ・公平さ ・公私の切り替え	・基本的な知識や専門知識
④	・学び続ける姿勢 ・失敗を恐れず挑戦する姿勢 ・周囲と協力する姿勢	・自分が考えていなかった目線での考えをたくさん頂き勉強になった。
⑤	・学生なりによく作っていた。	・たくさんの本、先生の授業 ・予想される生徒の反応について考えること
⑥	・私も学ばせてもらっている。 ・十分に指導できず申し訳ありません。	・生徒とのかかわりは楽しかったが、授業は難しかった。 ・教師の大変さも実感

表3 実習指導教員Cと教育実習生cの調査結果(X中学校)
(指導教員C:教職経験12年)

質問項目	実習指導教員C	教育実習生c
①	・教師の知識・技術を知り、自己課題をもつ（社会への第一歩） ・適性の判断（児童生徒、教師との人間関係が築けるか）	・実際の学校の様子を知る。 ・生徒を相手にすることで教え方や大切なことを体験し学習すること
②	適性、資質 ・がんばっているが、声が小さく、生徒と話ができない。 ・逃げないでほしい。	・コミュニケーション、教え方
③	・どんな児童生徒とも関係構築できる人間性を実習中少しでも見せてほしい。 ・礼儀作法、言葉遣い	・話し方、指導の仕方
④	・資質、能力 ・生徒の実態に応じて自分ができることは何か（研究授業、研究会は積極的に参加）	・全員が参加する授業にすること、板書、発問の仕方
⑤	・実習生がやりたいことを明確にもつ。	・先生からの助言・どんな発問をすればよいか。
⑥	・実習は自分にとって教師の原点だった。 ・すばらしい実習生もいるが、挨拶ができない人も。 ・次世代の教育を担う人材育成のために大学と協力していきたい。	・つらいことも多かったが、実習をしてみて足りないところがわかった。もっと学習しないとけない。

表4 実習指導教員Dと教育実習生dの調査結果(X中学校)
(指導教員D:教職経験14年)

質問項目	実習指導教員D	教育実習生d
①	・授業づくりや自己課題への気づき ・指導の実際を学ぶ。 ・生徒指導の視点に気づき、体験	・記載なし
②	・意欲や誠実に望む態度に欠けている時	・指導教員や子どもとの人間関係
③	・教科のこれまでの学習事項に関する理解 ・意欲や誠実さ	・話術
④	・生徒に対する重大な責任。その責任を果たすために自分にできることを一生懸命、誠実に行なわなければならないことを学んでほしい。	・記載なし
⑤	・実習生が良い授業計画を作成するのは無理なので、指導教員が授業の視点を根拠を示して伝えている。	・指導教員のアドバイス ・指導教員に言われるがままだったので難しくなかった。
⑥	・意欲があれば、できる限りの指導が可能。 ・適性がない場合には不可をつけるべきと思うが、大学と確認をしていかないと不可は難しいのが現実である。	・記載なし

表5 実習指導教員Eと教育実習生eの調査結果(X中学校)
(指導教員E:教職経験10年)

質問項目	実習指導教員E	教育実習生e
①	・教育を実際に行うことを通して“生”の生徒から工夫する点等を学び、その後の学生生活にいかす。 ・理論とは違う実際に触れることで応用していくことを憶える。	・現場体験、自分が求めている職業か確認し、自分が教師として足りないところを知る。
②	知識量に差 ・多様な経験を経ずに勉強だけしてきた学生は苦しそうだった。 ・大学で意味や位置づけなど背景について学んできていない。	・指導案作成。中学生にわかりやすく、楽しく作ること

③・ひとつの学習から関連事項も自ら学ぶ。 ・受身の学習法ではマニュアル教師、無気力教師になってしまう。	・楽しく学べるような指導案作成力、専門知識、ひきつける話し方
④・中学で学習する事項は理解しておく。 ・揚げ足取りにならないよう、研究会の準備をしてほしい。 ・大学の授業で内容の理解まではしておく。	・生徒にどう声かけをするか。
⑤・自分の中学時代はどうだったかを思い出してほしい。 ・全体の流れの中にその日の授業があるという感覚を意識して行ってほしい。	・教科書、資料集 ・楽しいワークシート作り
⑥・前期に2回実習はカリキュラム上やりづらい。 ・やる気に満ちた学生	・授業を作る(行う)のはすごく難しい。

表6 実習指導教員Fと教育実習生fの調査結果(X中学校)
(指導教員F:教職経験2年)

質問項目	実習指導教員F	教育実習生f
①・大学で学んだ知識 ・理論を実践することで深める。 ・教師としての態度 ・教師としてのものの見方・考え方を学ぶ。		・教育実習の実際を知る。
②・実習録提出の遅れ ・指導案の提出がぎりぎりになること		・子どもとの関わり方、叱り方
③・先を見通し、早めに行動する。 ・積極的に生徒と接する態度		・子どもが聞いてくれる授業づくり ・専門的な知識
④・生徒の実態に合わせた指導計画の大切さ(発問など) ・教材研究、教材づくりの大切さ		・TTとしての立場・実習を行う上で注意すること
⑤・教材観、指導観、生徒観などが身につけていないため、書く内容などどこに書いたらいいのか困っていた。		・教科担当の先生の助言 ・授業の流れ(1時間、前回次回へのつながり)
⑥・よくがんばっていた。3週間の実習で多くのことを学び成長した。		・始めの頃は子どもとの関係作りに悩んだ。もっと積極的にかかわっておけばよかった。 ・子どもに聞いてもらえる授業をするのが難しかった。自分にもっと知識があれば興味をもってもらえたのではと思う。 ・小学校の実習も楽しみたい。

表7 実習指導教員Gと教育実習生gの調査結果(X中学校)
(指導教員G:教職経験13年)

質問項目	実習指導教員G	教育実習生g
①・教科の指導等学校現場に必要な基本的な技術を学ぶこと ・現場の様子を実感		・自分の能力を発揮すること
②・実習指導は初めて的確な指導助言であったか不安		・生徒とのコミュニケーション ・指導案作成
③・一人の教師として子どもたちに接する気構え ・生徒とのコミュニケーション		・指導力
④・学校で子どもたちが学ぶとはどういうことか		・教材研究の重要性
⑤・1単元の時間配分はできており、計画通り毎時間できていた。 ・資料も積極的に収集していた。		・中学時代のノート ・発問作成
⑥・できるだけ生徒に接して、現場の教師の声を聞いて大学に戻ってほしい。		・自分の力のなさを実感

表8 実習指導教員Hと教育実習生hの調査結果(Y小学校)
(指導教員H:教職経験5年)

質問項目	実習指導教員H	教育実習生h
①	・社会経験を積み、教師の仕事に対する考え方や姿勢を学ぶ機会 ・就職後の拠り所	・現場で実力を試す。
②	・特になし	・子ども同士のトラブルの仲裁
③	・子どもとのコミュニケーション能力	・とっさの質問に応える応用力
④	・社会人としての姿勢、教職員としての姿勢	・念入りな準備が必要だということ
⑤	・予定通り提出、訂正、実践できていた。	・実習先の先生の授業 ・時間や児童の反応の予想
⑥	・3週間で多くのことを学んでいた。自分なりに整理して活動してほしい。	・とても楽しい日々だった。

表9 実習指導教員Iと教育実習生iの調査結果(Y小学校)
(指導教員I:教職経験6年)

質問項目	実習指導教員I	教育実習生i
①	・教師としての仕事を知ってもらう場 ・将来の選択肢としての教職	・記載なし
②	・やる気 ・子どもにとってかけがえのない時間なので精一杯やしてほしい。 ・自分の考えに凝り固まっている場合	・体力のなさ ・指導案作成 ・授業 ・児童理解
③	・だれとでも笑顔で付き合えること、話を聞く。 ・誠実さ、疲れていても出さずに頑張れること、コミュニケーション能力	・教科書の把握(内容)
④	・主観でよいから、これ以上できないというところまでやってほしい。	・授業を作るとはどういうことか
⑤	・そのクラスの子どもにあっているかを考える。 ・オリジナリティがありすぎるのもわかりづらい。 ・授業をしっかりイメージして作る。	・先生のアドバイス ・どうすればわかりやすくなるか
⑥	・実習生の指導を通して自分の足りないところを考えるよい機会。 ・真剣に、積極的な姿勢を見せてほしい。	・とても有意義で実りの多い時間を過ごすことができた。

表10 実習指導教員Jと教育実習生jの調査結果(Y小学校)
(指導教員J:教職経験7年)

質問項目	実習指導教員J	教育実習生j
①	・教師の仕事の体験	・自分の教育観を育てる。
②	・退勤時間が早いので指導時間がない。	・特になし
③	・個性、様々な特異な体験	・課題をこなす能力
④	・現場の雰囲気 ・授業のやり方	・自分の専門知識の浅さ
⑤	・大学ではどのような指導をしているのか興味	・記載なし ・記載なし
⑥	・学生を育てる上で大学との連携が大事	・貴重な体験でした。

表11 実習指導教員Kと教育実習生kの調査結果(Y小学校)
(指導教員K:教職経験12年)

質問項目	実習指導教員K	教育実習生k
①	・大学教育を実践の場で試す。 ・仕事を体験し、就職に生かす ・自分の資質を見極める。	・実際の現場を体験することにより教師の仕事を知り、自分に足りない部分等を学ぶ。
②	・困難は感じなかった。	・時間配分
③	・人間性(明朗・積極性・素直さ・謙虚さ) ・教材研究を丁寧にできる熱心さ	・常用漢字(自分の配属学年はどの程度の漢字がわかるのか)
④	・教師にとって教育研究の場が大切であること	・教材研究の重要性 ・発問の仕方
⑤	・提出が早く、ゆっくと教材研究ができ、担当教師のストレスも少なかった。 ・打ち合わせで指導助言した点を学生なりに解釈し、盛り込めて素晴らしい。	・児童の実態 ・児童全員が理解できるような発問を作ること
⑥	・学生の実習に臨む姿勢 ・子どもにとっては大事な3週間で影響も大きい。	・とても良い環境の中で実習させてもらえた。 ・担当の先生に多くのことを教えてもらい、ますます教師になりたいと感じた。

表12 実習指導教員Lと教育実習生lの調査結果(Y小学校)
(指導教員L:教職経験13年)

質問項目	実習指導教員L	教育実習生l
①	・机上で学ぶ教育論や講義とは違う、教育現場の実態を身をもって体験し習得	・自分の教師としての資質を確かめる。
②	・探求心や積極性、誠実さに欠けることがあり、指導しても授業の深まりがなかなか見られない。 ・勤務という自覚とけじめの無さ(友達感覚で子どもとかわる。)	・実習録を書くこと
③	・責任感、指導者としての厳しさ	・文章力、正しい言葉遣い
④	・授業は自らの意欲と創意工夫でいくらでも充実感や喜び、楽しさが増すこと	・研究授業は難しいことをしないといけないのか。一人では思いつかない授業を考えられて協力は大切だと思った。
⑤	・指導案や助言を素直に受け入れ、柔軟に対応した。子どもとの対話中心の授業の組み立て方などを徐々につかみ、楽しくわかりやすい授業を行うようになった。	・指導教員からの指導 ・発問の仕方
⑥	・指導案の書き方 ・授業の作り方、教材研究への意欲やアイデアを発揮してほしい。	・Y校は実習しやすかったが、他校を知らずに教師になりたいと思ってよいのか不安である。

表13 実習指導教員Mと教育実習生mの調査結果(Y小学校)
(指導教員M:教職経験8年)

質問項目	実習指導教員M	教育実習生m
①	・学習指導や生活指導を行い、教職についての適性について考える。 ・大学で学んだ理論を実際に試す。 ・社会人としての資質の向上	・実際に子どもの中に入って活動したり指導したりする中で教師という仕事等を体験すること
②	・意欲が高く指導を前向きに受け止める心構えがある実習生は成果ある実習になったと考える。 ・信念かこだわりか、指導を受け入れられない学生も見られる。	・児童を叱ること ・授業の時間配分、発問

③・子どもへの愛情（今までの実習生は子どもと関係がつくれていたのでよい。）	・前に立ってわかりやすく説明する力
④・教職をめざす課題意識をもって臨み、大学でじっくり考えてほしい。	・ひとつの授業をつくる難しさ
⑤・実習生に提供できる時間が限られている。行事も勉強になるが、落ち着いて実習ができないのでは？学生のニーズに合うのか？	・指導書 ・時間配分、メリハリ ・目標達成のためにどこに力を入れるか
⑥・記載なし	・中身の濃い充実した3週間だった。実際にやってみないとわからないことがたくさんあって、学びの多い実習だった。 ・子どもたち、先生からいろいろなことを学ぶことができた。

IV 考察

少数事例ではあるが、比較した6項目について指導教員と教育実習生のとらえ方を比較検討した結果、以下のような傾向が見られた。なお、教員の回答の中には今回担当した教育実習生に対してではなく、過去の教育実習生あるいは一般論として述べた意見も含まれていたように思われた。

1. 教育実習の意義：理論と実践の融合

実習の意義については、指導教員も教育実習生も、大学で学んだ理論と実践とを結びつける場であること、教師としての適性を確認する場としてとらえており、双方の意見は共通していた。さらに指導教員では、教育実習生に学校現場の中で実践されている教師の多様な仕事を貪欲に学んでほしいという意見もあった。

2. 教育実習における困難点：実習意欲と指導技術や知識

指導教員にとって教育実習生の意欲や誠実さの乏しさ、教科などに関する知識量の個人差、提出物の遅れが指導を困難にしているようであったが、加えて多忙な学校現場の中で、教員が指導時間を確保する困難さも述べられていた。一方、教育実習生は指導案作成、わかりやすい授業作り（発問、時間配分など）、子どもとの関わり方について力不足、困難さを感じていた。

3. 教育実習生がもっとつけておくべき能力：教育専門職・職業人としての意識と指導技術や知識

教育実習生は教科の知識や指導技術をあげているのに対して、指導教員は意欲や主体性、誠実さ、謙虚さなどの学ぶ姿勢、教材研究、仕事の段取りやコミュニケーション能力、礼儀、責任感など教育専門職、職業人としての意識や力量をもつことを望んでいた。また、大学で教科の基礎的内容や意義、位置づけなどについてきちんと学んでおいてほしいとの要望もあった。

4. 研究授業、研究会からの学び：指導の意味や創意工夫と教材研究・授業に対する責任

教育実習生は研究授業や研究会を通して、自分の不足している点を見出し、教材研究や研究会の重要性、授業に対する責任を認識している点では指導教員と一致していた。指導教員ではさらに、常に児童生徒が学ぶことの意味を問い、授業を創意工夫して充実感、喜びを味わってほしいとの意見があった。

5. 授業計画の作成：児童生徒の学習状況の把握、実践からの省察

指導教員は担当時間だけでなく、全体の流れを考えた授業計画を立案すること、実際の児童生徒の状態を想定しながら計画することなど現場に根ざした授業計画になることを望んでいた。教育実習生もこのような助言の重要性を理解していたが、実力不足のために実行は困難であった。しかし、指導教員の丁寧な助言が大変参考になったと記述していた。さらに、指導教員の助言だけではなく、示範授業からも前後の授業との関係、時間配分や発問など細部について具体的に学ぶことができたようだ。以上のように、授業計画の立案と実施について、教育実習生は学校現場か

ら非常に多くのことを学ぶことができた。

6. 全体的な感想：大学と実習協力校との一層の連携

教育実習生は教育実習を通して貴重な体験ができたことを深く感謝しており、大学での今後の学びにいかしていきたいと記述している。指導教員にとって教育実習生の指導は時間的にも精神的にも大きな負担になっていると推察されるが、指導教員から「自分自身の児童生徒に対する指導を省察する機会としてとらえている。」という意見があり、大変有難く思う。このような指導教員の気持ちに応えるために、教育実習生は教育実習に真剣に取り組むこと、子どもへの影響を十分に考えて誠実で意欲的な態度をもつことが大切であろう。教育実習生が大学で学んだ基礎的知識や最新の知見を活用し、授業づくりに挑戦する機会として主体的に実習できるよう、大学と実習協力校とが今後一層連携を取り合い、教育実習生を共に育てていきたいと思う。

本調査を通して、指導教員は実習生に主体的な学びの姿勢を期待しているのに対して、教育実習生は目の前にある課題や指示されたことをこなすことで精一杯であり、余裕がない状況がみられた。しかし、今回の学生の調査時期が、前期実習という初回の経験直後であったこと、指導教員への調査は約8ヶ月後と異なっていたことなど調査方法も結果に影響を与えていると推察されるため、今後研究方法の改善が必要と思われる。

引用文献

- 1) 鳥海順子・古家貴雄・谷口明子・角田修・長谷部美佐子・山本英寿・石井敬・手塚雅仁・青木洋子・澤登義洋・望月之美・泉晋一 (2010) 山梨大学教育人間科学部と附属4校園との連携に関する研究Ⅰ. 山梨大学教育人間科学部紀要, 第11巻, pp357-365.